

第1章 ユニバーサルデザインによる建物づくり

対話によるデザイン、さりげないデザイン、追い求めるデザインを実現するために

この章のポイント:

- ・ 建物づくりのプロセス
- ・ 利用者ニーズの把握や評価手法

1 建物づくりのプロセス

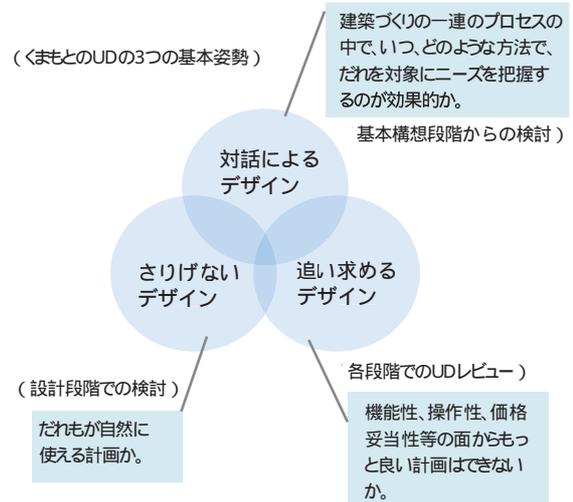
(1) 対話によるデザインを進めるための基本構想の策定

多くの人が利用する建物といっても、建物に求められる機能や性能は、用途や規模、利用の仕方によって異なります。

このため、建物の基本設計を始める前に、UDの視点からどのような建物にしたいのか、また、いつ、どのような方法で、だれに意見を聴いて、設計に反映させるのか、といったUDの観点からの事業コンセプトを明確にする必要があります。

最初からUDの視点で、できる限り特別な設備や仕様を用いず、設計を工夫することで、余計な初期投資を押し返すことができ、改修や維持管理に要する費用を軽減することができるなどトータルなコストの低減を図ることが可能となります。

UDの基本姿勢を活かした建物づくり



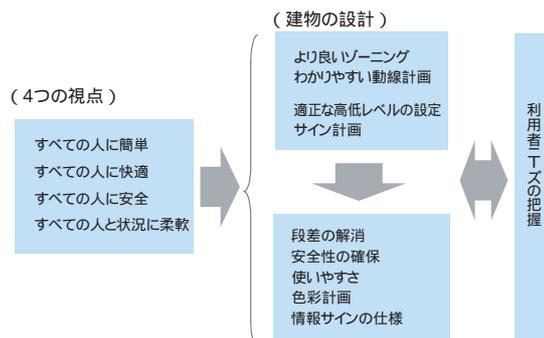
利用者ニーズ把握のための方法と効果はP 13、14を参照

(2) さりげないデザインのための設計の進め方

基本設計の段階では、基本構想に従い、具体的に平面計画をまとめていくこととなります。利用者の行動を考えながら、より良いゾーニング、わかりやすい動線計画、適正な高低レベルの設定、サイン計画等を行います。基本設計ができたなら、「すべての人に簡単」、「すべての人に快適」、「すべての人に安全」、「すべての人と状況に柔軟」という4つの視点で細部計画をまとめていきます。移動空間や生活空間での段差解消、安全性の確保、各設備の使いやすさ、情報装置の選定や仕様が適切かどうかを確認し、アイデアを盛

り込みながら実施設計を進めていきます。設計に際しては、利用者の意見を聴き、計画に反映させていくことが大切です。

設計におけるUDの視点



(3) 工事の施工段階での検証

平面的な図面から立体的な空間を正確にイメージすることは、なかなか難しいことです。

このため、ある程度形がみえてきた工事の段階で実際に建物に入り、サインの位置や形状、建物細部のデザイン、設備機器の位置、床や壁の仕上げ等について、利用者の意見を直接聴くワークショップ¹を行うことが有効といえます。



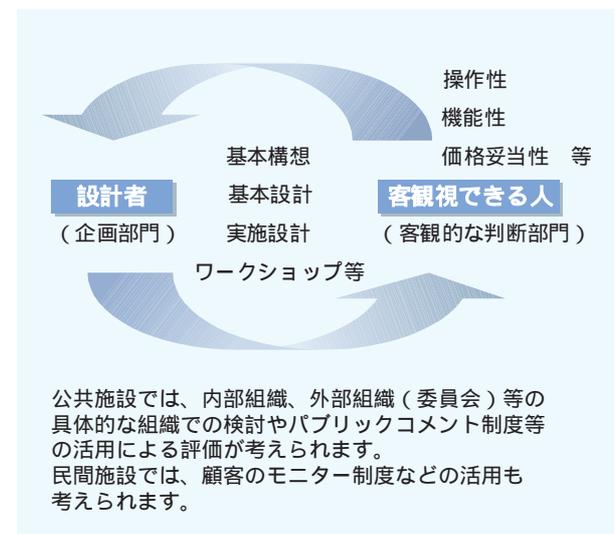
サインの見本により設置位置や表記のわかりやすさを検証

(4) 追い求めるデザインのためのUDレビュー(見直し、評価)の実施

設計者又はプロジェクトチームが提案した計画内容は、基本構想、基本設計、実施設計、工事又は利用者の声を聴いた段階で、別の人からUDの観点から望ましい設計であるかどうか評価したり、同じ機能若しくは機能をアップしてもっと安価な方法はないかという価格妥当性を視野に入れて見直していくことが、UDを実現していくうえで高い効果が期待できます。

最初から標準仕様のしやすさを設けたり、誘導ブロックをはりめぐらすのではなく、まずは徹底的に設備のない状態を考えて、そのうえで必要な設備や空間を考えていくことも重要です。

UDレビューのシステム



(5) 建物管理者との情報の共有

利用者の意見を多く取り入れ、優れた建物が完成しても、十分に機能を発揮し、意図したとおりに利用されるかどうかは、建物管理者の意識の仕方で大きく左右されます。

あらかじめ管理者がわかっている場合には、企画、設計等の段階から参加を呼びかけ、また、既存の建物の改善点を探するときにも、管理者の意見を取り入れましょう。

¹ ワークショップとは、専門家と利用者が共通の目的に向かって可能性を探り、知恵を出し合い、議論を尽くす仕掛けづくり。利用者の参画意識を高め、より具体的な提案が行えるよう工夫することが必要です。

2 利用者ニーズの把握や評価の方法

(1) アンケートや聞き取り調査

施設利用者に対するアンケートや聞き取り調査では、できるだけ簡単に答えられるよう工夫する必要があります。そのためには、聴きたい内容を絞り込み、わかりやすい文字や表現を使い、できるだけ選択肢により回答しやすくします。また、視覚や聴覚に障害のある人を対象にアンケート調査を行う場合は、アンケートを行う場所や方法に工夫が必要です。少人数のグループで面接形式でヒアリングを行うとより多くの意見が得られます。

障害者に協力をお願いする場合の配慮について

障害者ご本人とコミュニケーションをとることが重要であり、介助者等がいても、ご本人に話しかけましょう。聴覚に障害のある人が、すべて手話で話し、視覚に障害のある人がすべて点字を読めるわけではないので、事前に確認する必要があります。

視覚障害者には、なるべく正面に立って話をし、「あっち」「こっち」などの代名詞は使わず、物の場所を時計の文字盤の位置で説明したり、「前方へ10歩のところ」など具体的に伝えましょう。

聴覚障害者には、筆談、手話、口話、身振り手振りなどがコミュニケーションの手段となります。筆談では、丁寧な文より簡潔な表現を用います。口話は口の動きがよく見えるように配慮する必要があります。

(2) ワークショップの進め方

ワークショップは、企画段階での利用者ニーズの把握や工事の施工段階での細部計画の確認など、その目的によって実施する時期や参加者を検討する必要があります。できる限り幅広い人に参加を呼びかける必要があります。施設を見てまわるときは10人程度のグループとし、参加者全員が同じ問題意識を共有しながら討論ができるようにします。一回のワークショップで施設全体を見て回れないときは、回を重ねたり、グループで担当を決めたりして参加者の負担を少なくする配慮も必要です。また、ワークショップでの意見に対しては、「できるもの」と「できないもの」を明確に答え、参加者に伝える必要があります。

ワークショップの進め方

ワークショップを企画する。

(いつ行うのか)

- ニーズの把握: 企画設計段階
 - 使い勝手等の検証: 工事段階
 - 次回への反映: 建物使用段階
- (だれに参加してもらうのか)
- 高齢者、障害者、子ども、介助者(ボランティアを含む)など目的に応じて

ワークショップを実施する。

(どのように行うのか)

- 時間やルートの設定(2時間以内)
- グループ分け(10人程度以下)
- アドバイスを行う専門家の参加の要否
- 意見の聞き取りの方法の検討
- ・ 様式への記入、録音、代筆など

(参加者への配慮)

- ・ 車いすの人は筆記者がいた方が望ましい
- ・ 資料の文字を大きく、わかりやすい表現で
- ・ 聴覚障害者には手話通訳者の参加やホワイトボードを用意など

ワークショップの結果を反映させる。

(建物への反映)

- ・ 工事段階で手すりや衛生機器の仮設置を行った場合はできる限り工事に反映させる。
- ・ 竣工段階でも手直しができる場合は反映させる。

(建物へ反映できない場合)

- ・ 参加者には結果は必ず知らせる。

(3) 建物を使い始めてからの検証と効果

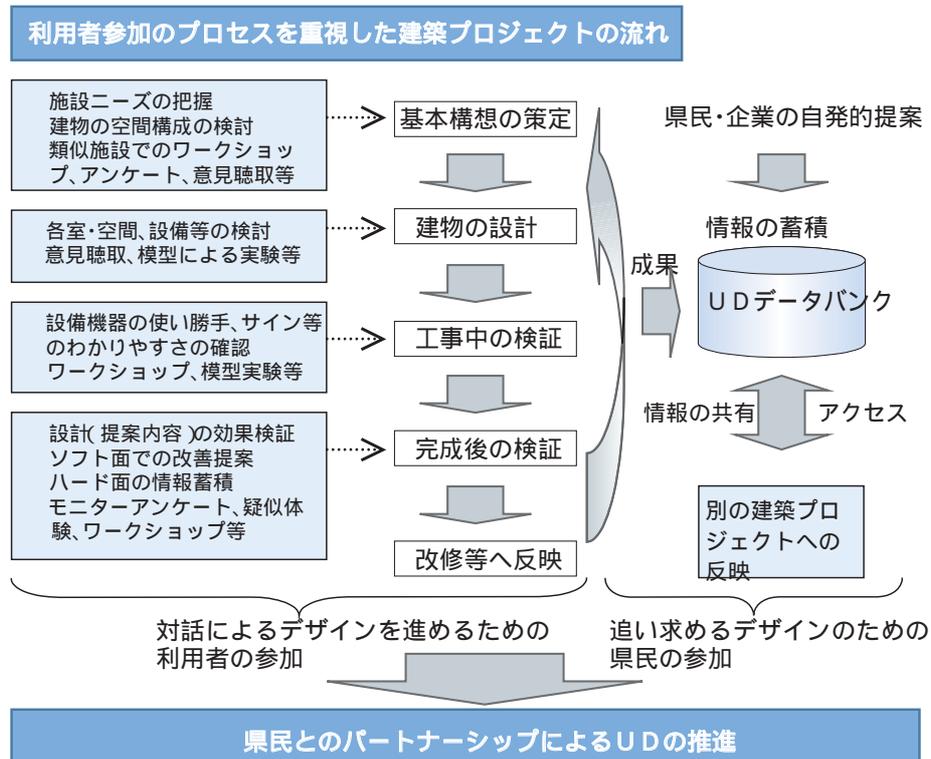
完成した建物を実際に使い始めると、新たな課題や改善点がみえてくることがあります。この段階で、ワークショップやアンケート調査などを行い計画内容を検証することは、利用者にとっても参加しやすく、より具体的な提案も望めるため、将来の改修計画を立てるうえでも貴重なデータとなります。

また、この情報を多くの人が共有できれば、次に建物を計画する人は、効率的に新たな企画を行うことができます。ワークショップ等に利用者が参加する機会を増やすことで、それぞれが日常的に利用している建物の自発的な改善提案にもつながっていきます。



ワークショップにおいて問題点を把握するための高齢者疑似体験の様子

建物づくりの各段階での利用者(県民)参加のシステムとUDの拡がり



利用者参加の手法や時期は、個々の建物の用途や利用のされ方で検討する必要がありますが、基本構想から設計の早い段階までの間で利用者参加による意見聴取等を行うことが望ましいといえます。

3 改修工事の留意点

UDによる建物づくりは、新築や建て替えの時だけではなく、既存の建物の改修の時にも取り組んでいく必要があります。

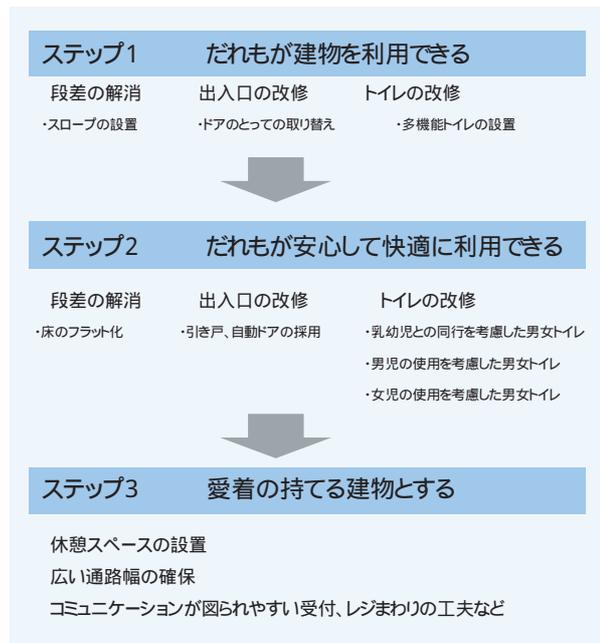
改修では、建物の構造的な制約があるため、すべてを満足させることは困難ですが、実際に建物があるため、利用者の声を十分に活かすことができるなどのメリットがあります。

構造や規模等の制約が多い場合でも、出入口等の移動経路やトイレ等を中心に工夫していくと、高齢者や車いす使用者等が今まで利用できなかった店舗や飲食店なども利用できるようになります。

ニーズを把握するために、教育研究機関、NPO、子育てサークル、老人会、障害者団体等の人に協力を求めたり、管理者や従業員等が自ら疑似体験を行うことで問題点を探すことも重要です。

新たに設ける設備等は、配置、形状等をさりげなくデザインし、既存の建物に馴染ませる工夫が必要です。

既存建物での改修工事の視点



屋根の付いた車いす使用者用駐車場とスロープを設置した例